

学界の動向

第 25 回 札幌冬季がんセミナーを終えて

高 後 裕*

平成 23 年 2 月 12 日（土）、13 日（日）の両日、ロイトン札幌において第 25 回札幌冬季がんセミナーが開催されました。本セミナーは、公益財団法人札幌がんセミナーが中心となって、毎年さっぽろ雪まつりの時期に開催されているがんに関するセミナーです。特定のがん領域に限定せず、がん診療全体を色々な角度から見つめることができるセミナーとして、北海道のみならず広く国内で認知されています。期間中のべ 550 名の医師を中心とした医療関係者の参加者を得て、盛会のうちに無事終了しました。



今回のテーマは「いまがんを考える 2011 - 高齢化社会・疾病予防社会におけるがん医療-」で、最新のがん診療に関する講演に加えて、近年問題となっている高齢化にともなうがん診療上の問題点や在宅・看取りといったテーマや、医療経済に関する問題点を中心としたセミナーとなりました。

最初のセッションでは、「がんの先端医療」と題して各種がん領域の話題が講演されましたので以下に簡単に内容を紹介します。

1 多発性骨髄腫に対する治療の新たな展開

木崎 昌弘 先生（埼玉医科大学総合医療センター血液内科 教授）

高齢者に多く、難治性の血液腫瘍である多発性骨髄腫に関する最新治療の現状とその将来について紹介されました。従来の化学療法では長期生存が望めなかった本症も、新規分子標的治療薬であるサリドマイド、レナリドマイド、ボルテゾミブなどの出現によって治療成績の向上と長期生存が期待できるようになり、これら薬剤を中心とした治療戦略の確立が重要であることが述べられました。

2 頭頸部腫瘍におけるナビゲーション手術

福田 諭 先生（北海道大学大学院医学研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野 教授）

最新のコンピューターテクノロジーを駆使したナビゲーションシステムを使用した耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の手術に関して紹介されました。手術ナビゲーションとは、手術部位を CT や MRI の画像上にリンクさせて、術者の視点と目的部位との位置関係をリア

*旭川医科大学 内科学講座 消化器・血液腫瘍制御内科学分野



ルタイムに把握するシステムで、その有用性や限界点、将来性などについて語られました。

3 肝がんに対する低侵襲手術—腹腔鏡下肝切除

若林 剛 先生（岩手医科大学医学部 外科学講座 教授）

再発の多い肝がんに対する低侵襲手術として始まった腹腔鏡下肝切除術ですが、当初は小範囲の肝部分切除がなされていました。しかしながら、最近では、外側区域切除は定型化され、さらにはより広範な肝葉切除まで可能となってきています。豊富な症例をビデオを交えて提示され、肝がん治療における低侵襲手術の最先端をお話いただきました。

4 大腸癌分子標的薬の“辛口”臨床評価

島田 安博 先生（国立がん研究センター中央病院 消化管腫瘍科消化管内科 科長）

大腸がん治療は、ここ数年の間に著しく進歩しました。従来からの抗がん剤を有効に使用するだけでなく、新規分子標的薬の登場により大腸がん患者の生存期間は大幅に延長しています。しかしながら、これら

の治療にかかる高額な医療費と患者が受ける利益が相関しているのかどうかといった視点での検討は不十分です。標準的治療としてエビデンスが求められている中で、新鮮な切り口で現在のがん医療の抱える問題点が議論されました。

5 進行・再発非小細胞肺癌化学療法における S-1 の役割（可能性）

吉岡 弘鎮 先生（倉敷中央病院 呼吸器内科 兼 外来化学療法センター部長）

5-FUのプロドラッグである S-1 は、国内を中心に多くの癌腫で有効性が証明されてきました。肺がんにおいても S-1 単剤の有効性が期待されていますが、プラチナ製剤やタキサン系薬剤との併用化学療法の有効性に関しても、大規模臨床試験が日本を含むアジアを中心に行われています。肺がん治療における標準治療としての S-1 に位置づけ・役割に関して紹介されました。

6 乳癌治療における経口フルビドリン系薬剤の新たな展開

中山 貴寛 先生（大阪大学大学院医学系研究科 外科学講座 乳腺・内分泌外科学分野 講師）

我が国では、乳がん術後補助化学療法において UFT が臨床現場で広く使用されてきました。特に、ER 陽性症例では、Tamoxifen (TAM) 単剤療法に比べて UFT を併用することで再発リスクを有意に低下させますし、代表的な術後補助化学療法である CMF + TAM と UFT + TAM の比較試験によっても同等の効果があることが証明されています。我が国から世界に発信する最近の優れた臨床試験結果をもとに、ER 陽性乳がん治療における UFT の可能性に関して紹介されました。

引き続き二つ目のセッションでは、「高齢者がん患者のがん診療」と題して、最近の高齢化に伴うがん診療にまつわるテーマについて講演されました。

1 高齢者のがん治療 - 前立腺がんを例にとって -

鳶巢 賢一 先生（聖路加国際病院 がん診療特別顧問）

早期前立腺がんの罹患率は近年急上昇しており、治療法には、全摘術から、各種放射線治療、時にはホル

モン療法や無治療経過観察など色々な選択肢があります。高齢者に対する前立腺がん治療を決定する上では、それぞれの年齢に応じた「生活の質を維持した生存期間の延長」が治療の目的であり、必ずしも根治にこだわるのが最重要とはならないことが強調されました。前立腺がんを例にとり、高齢者のがん診療においては、単純に患者の歴年齢によって治療戦略を立てるのではなく、個々の患者の持つ合併症や社会的背景、本人の希望などを考慮の上で判断する必要性などが述べられました。

2 在宅看取りについて

鈴木 雅夫 先生（医療法人社団爽秋会 ふくしま在宅緩和ケアクリニック 院長）

東北（宮城2か所、福島1か所）で在宅緩和ケアを専門とする診療所を開設し、1年間に300人以上のがん患者を在宅で看取っている経験が紹介されました。病院で亡くなるのが当たり前になってきたことから、患者にとっても支援する家族にとっても家で誰かが亡くなるといった経験がないということからくる種々の問題点が示されました。がんで亡くなる高齢者はこれから益々増加すると予測されている一方で、患者を支援する家族もまた高齢であったり少人数であったりする中で、在宅看取りの意義・現状などが話されました。

三つ目のセッションでは「予防医療とがん医療の経済学」と題して、最近の子宮頸がんに対するワクチン療法の話と経済学的視点から見た現在の薬物療法の話が紹介されました。

1 子宮頸がんの最新の予防と治療戦略

櫻木 範明 先生（北海道大学大学院医学研究科 生殖内分泌・腫瘍学分野 教授）

子宮頸がんは若年女性に罹患率の高いがんであることはよく知られ、子宮頸がん検診によって早期発見・早期治療が図られています。また、その原因がヒトパピローマウイルス（HPV）であることが明らかにされ、最近ではHPVワクチンが利用可能となり、HPV感染の60-70%が予防できるようになっています。子宮頸がんは若年女性に多いことから、治療後長期にわたる生活の質が重要な問題となります。このような点に配慮した現在の子宮頸がん治療の現状について紹介され

ました。

2 進歩する薬物療法と医療経済 — 国民目線によるがん治療の価値評価 —

田倉 智之 先生（大阪大学大学院医学系研究科 医療経済産業政策学 教授）

一般的には価値のあるものは報酬も高くなります。それでは、医薬品の価値とは何をもって評価すべきでしょうか。このような観点から現在の高額な医薬品に関する経済学的な考え方が論じられました。特に、英国のNICEが大腸がんに対する分子標的治療薬のファーストラインでの使用を却下したケースを例にとり、その経済評価の考え方や費用効果分析の事例を紹介しながら、がん薬物療法におけるアウトカムの観点から診療報酬のあり方が述べられました。

初日、二日目の最後には Alex Yuang-Chi Chang 先生（Johns Hopkins Singapore International Medical Centre）と仙道 富士郎 先生（山形大学 前学長・名誉教授）による特別講演がありました。Chang 先生は、「The Changing Landscape in the Management of NSCLC: Implications of Personalized Treatment.」という演題名で、非小細胞肺癌に対する豊富な治療経験をもとに、過去30年間における薬物療法の進歩について話されました。特に、最近における分子生物学的知見の蓄積から開発された分子標的薬の進歩は目覚ましいものがありますが、最大限の治療効果かつ最小限の副作用を得るためには、がん細胞の組織型、標的分子の情報など患者の個別化ということが重要になってきていることが示されました。

仙道先生は、「発展途上国における医学研究における一考察 — 南米パラグアイにおける JICA シニアボ



ランティアの経験から」と題して、JICAのシニアボランティアとして2年間南米パラグアイ国立アスンシオン大学所属研究所に派遣され、主に感染症研究の指導に当たられた経験をお話しになりました。発展途上国での医学研究は、必ずしも先進国での医学研究と同一レベルのものが求められているとは限らず、発展途上国の人々の実情に応じた、健康増進と疾病予防・治療に結びつくものであれば、その研究は十分の評価されうるものであるということをお話されました。このような経験から、先進国における医学研究のあり方に関しても先生の感じている点についてお話になりま

した。

本セミナーは discussion の時間が十分にとられていたこともあり、フロアーから多くの質問・意見があり大変活発な議論がなされました。参加者にとって得るところの多いセミナーになったのではないかと思います。

最後に、本セミナーの企画・運営にご尽力いただきました公益財団法人札幌がんセミナーの小林博理事長および事務局・プログラム委員の皆様にお礼申し上げます。